



常寧城の攻撃

昭和十九年九月二十九日、常寧県城の攻撃を翌日にひかえて待機している日本軍の陣容は、次の通りであった。

歩兵第二百十六連隊（連隊長石川明大佐）

歩兵第二百十七連隊（連隊長木佐木清次大佐）

師団工兵隊一個小隊（小隊長金澤徹郎少尉）

師団司令部砲兵隊一個中隊（中隊長越中屋正雄中尉）

玉川支隊（支隊長玉川長吉大佐）

玉川支隊長の玉川大佐は當時を回顧して、師団工兵隊の金澤少尉宛書簡の中で次のように述べている。

「昭和十九年衡陽攻略後の九月、私は独立山砲第五連隊の第一、第二大隊を指揮し、檢兵団の太田支隊に配属させられ零陵まで進出いたしました。その夕刻、司令部に参りましたところ次の軍命令に接しました。

太田支隊ハ独立歩兵一ヶ大隊 山砲二ヶ大隊ヲ基幹トスル一支援ヲ編成シ 来陽ニ在ル樺部隊ニ協力シテ常寧県城攻略ニ任ゼシムベシ

私が先任者でしたから、その場で支隊長をお引受けし、翌未明出發しました。

常寧は私どもにとっては約十軒の反転に近いところ、もう第三師団が攻略しているのではないかと不審に思っておりましたが、第三師団配属の独立迫撃砲大隊長に会ったところ、第三師

団は攻撃を中止して他の兵団に譲り前進中、このことに勇躍して行軍いたしました」

玉川書簡の中で、第三師団（幸部隊）がすでに常寧を攻略しているのではないかと推測されているのは全く無理のないはなしであった。しかし第三師団の常寧県城の攻撃は実に次のような血涙の記録をのこしているのである。

八月二十九日、第三師団は第十一軍の最外翼から来陽を出撃、秧田墟（秋田七と記載される地図もあり）にて交河を渡河し、直ちに敵と遭遇し、静岡歩兵第三四連隊は三十日竜門隘（常寧東方二四軒）を突破、下灣を通過した。この付近は豪雨のため水田は冠水、道床は崩れているため進路の判定は困難で、連隊は図上の二條実線路と思われる石畳の旧道を発見し（幅一米余）、煙州湖を経て早くも常寧東南七軒の六陂舖に達した。一方、岐阜第六八連隊は二十九日秧田墟渡河後、火砲を有する敵第二六軍の一部と交戦し、この日に主力は竜門隘七三〇高地を占領、三十日には沙江舖の敵を撃破、夜には東冲舖に達し、その西方二軒にある烏巔山、金塘で敵第三七軍第六〇師約五百を撃破し、三十一日早くも常寧東方三軒の曲潭市に達した。九月一日明方、珍らしく飛来した軍直機は「常寧ニハ堅固ナラザル陣地アリ、目視シ得ル敵兵約百人。老橋カラ泉江橋ニ通ズル路上ニ約六百人ノ敵南下中、常寧―老橋間ニ土民避難中」の通報があり、第六八連隊長は直ちに第二大隊（二個中隊と大隊砲一門）を先遣隊として常寧北側を迂回し老橋（常寧北西八軒）に挺進せしめ、自らは第一大隊と第二大隊の残部を率

い果敢にも県城の攻撃を開始した。一方、第三四連隊は常寧の攻撃に関係なく速やかに祁陽に進出し、湘桂行路を南下中の第十三師団歩兵第一〇四連隊（仙合）と策応し、さらに零陵への突進を命ぜられていた。第三師団司令部は曲潭市に進む向かっ出し、常寧攻撃に野砲第三連隊の一部（野砲一個大隊、歩兵一個大隊）をさらに注ぎ込んだが、二月になっても攻撃は進捗せず、ここに師団長は歩兵第三四連隊に第六八連隊第二大隊を配属し、祁陽南方に突進せしめた。師団長としては、第三四師団の指揮下にある歩兵第六連隊および騎兵第三連隊の速やかな常寧への追及を熱望したが、第三四師団の来陽への進出がおくれたため実現しなかった。三日、岐阜連隊は方針を変え、北門から一挙に攻めすべく部署を変更した。この時点で第十一軍より「第三師団ハ常寧ノ敵ニ介意スル事ナク、速ヤカニ祁陽南方地区ニ突進スベク」命令が到達した。

ところが当時常寧の攻めについては、九月二日未明城外に殺到、三日夜これを完全に攻めしと報道され（出所は現在にいたるも全く不明）、重慶軍当局も戦況公報で九月三日これを認めた。（九月五日『常寧はまだ我が手中にある』と訂正）、四日になって連隊は北側より攻撃したが、城壁の破壊口が不完全であり、その上城壁直下は膝を没する連沼であったため夜襲も不成功であった。それ故第三師団長も血涙をのんで、九月五日岐阜連隊に常寧西側三軒の鷲湖嶺北側地区に転進、同地付近を確保せしめた。この時ようやく歩兵第六連隊は竜門隘、騎兵第三連隊は煙州湖（煙州湖）に達したが、師団長は敢てこれらの部隊を常寧に注ぎ込まなかった。九月六日になると静岡連隊

瀏陽、醴陵、衡陽、常寧は中国軍の兵站基地として重要な役割をもっていた。従って蒋介石は他の拠点は撤兵してもこの四つの基地だけは死守を命じ、あくまで抗戦して爾後の作戦に備えていたのである。この意味において最後に残った兵站基地常寧奪取の成否は、日中両軍の将来に影響するところが非常に大きかったのである。

第二一六連隊長石川明大佐は来陽に集結中、第三十四師団長伴健雄中將から「第三師団ト交代シテ常寧ヲ攻撃スベシ」との命令をうけた。それは九月五日頃と思われる。石川連隊長は急遽常寧に赴いて、橋本熊吉大佐（岐阜第六八連隊長）と会って所要の申し送りを受けた。「城壁は堅固で敵もまた頑強なため、死傷続出している」と橋本大佐。石川連隊長はその後すぐことが出来ぬまま、連隊長殿（石川大佐のこと）に申しつぐことになったのはまことに残念です」というと男泣きに泣いた。またある中隊長は「この城門に向い再三再四突撃をしたのですが、死傷続出するのみでそのたびごとに失敗を繰返しておりま」と率直に話してくれた。石川連隊長は、こいつは容易でな

いぞ、と身の引きしまるのを覚えた。

第十一軍の骨幹師団と自他ともに許す第三師団が、なぜ常寧を陥せなかったのか。文字通り難攻不落の牙城なのか、それとも攻撃法に欠陥があったのか。頭脳の戦法を得意とする石川大

は零陵飛行場、仙合連隊は零陵県城に突入し、前者は道県へ、後者は全県への追撃態勢にあった。

九月十六日、先に常寧の攻撃を中止して兵力を零陵に集結していた岐阜連隊は南下を開始した。なお岐阜連隊が常寧を発ったのは九月十日で、午前二時唐家湾（常寧北東五軒）に集結し、午後七時二十分南風坳（常寧北西四軒）を出発して常寧に向かっている。

第二一六連隊長の回想によると「なぜ常寧西側の高地群に攻撃の重点を指向…」の言葉が見当たらないが、図上によるとこれらの西北高地、南方の四七〇、西南六一〇高地を静岡連隊が三十一日にはすでに占領していたということもあるが、祁陽突進を急ぐあまりこれらの攻撃拠点を放棄した事は痛恨の極みであった。

後の話になるが、この岐阜連隊は今次作戦にあってはほとんどこの敵第三七軍との戦闘に終始し、柳州羅堡街において遂にこの軍部を潰滅せしめて復讐を遂げた。軍事委員会直轄下にあった敵優秀軍も、再び終戦まで日本軍前面に姿をあらわさなかったのである。なお、後出の若林第一大隊は醴陵の戦闘で感状をうけ、全軍に佈告された優秀な大隊である。

常寧の周辺から第三師団の最後の部隊が退いたのは九月十一日であった。

それから約十日を経過して、わが第二一六連隊を初めとする大阪編成の各部隊が、常寧県城の前面に姿を現すことになるのである。

佐は敵情、付近の地形、城壁の状態などを詳細に調査して、第三師団攻撃失敗の原因を次のように結論した。

- 一、ただガムシヤラに攻撃して準備が不十分であった。
- 二、砲工兵の協力が不十分であった。
- 三、城壁に向って主攻撃を強行したこと（常寧西側には城土の丘陵に立つ石川連隊長の胸中に、すでにあの常寧県城攻撃の構想がまとまりつつあったのである。

常寧は北緯二六・五度、ほぼ日本の沖縄の緯度である。高地とはいえ九月の太陽は赫々として照りつけていた。県城を望む赤土の丘陵に立つ石川連隊長の胸中に、すでにあの常寧県城攻撃の構想がまとまりつつあったのである。

玉川支隊長の書簡は語る。

「椿部隊には同期の石川がおるはず。これと協力戦闘が出来たら実に愉快だと馬上で思っている矢先、特別通信隊より無線第一報。

玉川支隊長トハ玉川長吉大佐ニアラズヤル石川
やあ有難い、実現だ。すぐ返電。

卒業以来三十年、戦場ニ於テ相協力スルヲ喜ブ玉川
真に劇的な気分でした。

石川候補生とは陸士で第二中隊第三区隊、しかも同室。師団長伴健雄中將は私が野砲学校甲種学生の際の戦術教官。課目は堅城突破作戦。なんと思われたことでしょう。主攻撃正面は必ず石川連隊。そしてこれに協力。学生るとき教えられた通りにやればよいのだ」。

玉川支隊の將兵は支隊長の決意を象徵するかのよう、全員闘志を漲らせて祁陽方面から東へ東へと常寧に向かって前進をはじめた。この時第二一六連隊の主力もまた常寧への道をこれは来陽方面から西へ西へと急いでいたのである。

九月二十日、その夜天候は雨。尖兵中隊は第五中隊であった。昭和十九年後半の大陸戦線は制空権を完全に米空軍に握られていた。つい四カ月前の岳麓山攻撃では、樁部隊全將兵が見守る上空から、手に汗にぎる爆弾投下の妙技を見せてくれた軍部隊（第五航空軍）であったが、その後はほとんど戦線に姿を見せず、その逆に怖いものなしとなった米機がはいままに我が地上部隊に攻撃をくわえてくるようになった。その結果、遂に昼間は部隊の行動は不可能になり、やむを得ず行軍は夜間に限り、昼間は部落または森の中に遮蔽して睡眠をとるとい、変則的な行動に切り換えなければならなかったのである。

酷暑は夜行軍が涼しくてよいだろうと考えられるかも知れないが、このように完全に昼夜を転倒するとマイナス面が大きかった。明るい昼間はいかに疲れているとはいうものの長時間熟睡は不可能で、まして敵機が上空を旋回中は眠れという方が無理である。対空監視哨が「爆音」と叫ぶや否や、兵士達が洗濯物を取り入れるためにどれだけ走り回ったことだろう。その疲労が必ず夜の行軍にあらわれてくる。

夜行軍では特に尖兵長の苦労が大きかった。昼間なら遠方の山や部落あるいは道路の曲直では地図上の現在位置を確認出来るのであるが、夜間になるとほとんどそれが不可能である。五万分の一の地図に示された二條実線路さえも、小隊が一行

ようやく雨がやみ雲間から太陽が照りはじめた。昼頃であった。やっと待ちに待った宿営の命令が出たのである。

農家の一隅に体をやすめた第二大隊長山口少佐は、机の上に五万分の一の地図を拡げた。常寧まで十軒あまり。道路は片点線路であるがほとんど真直ぐに常寧の東側までつづいていて、線路であるがほとんど真直ぐに常寧の東側までつづいていて、かなり高い峠から県城を見下ろせるかたちになっている。大隊長は伝令の水野清一上等兵を振り返ると、篠田少尉を呼んでくるように命じた。その一個小隊を護衛に常寧周辺の地形偵察を思い立った。

水野上等兵が約二百米はなれた第五中隊の宿营地まで駆けつけたとき、少尉はマリヤの発作で悪感戦慄とたたかっていた。マリヤの発作は疲れた時に起る。篠田少尉は前夜尖兵長であった。しかし命令である。再び軍装をととのえ、大隊本部へ向かった。

約三十分後、第五中隊の第一小隊は、大隊長に指示された道を西方へと前進していた。赤土の道は森の中を、ほとんど彎曲することを知らずに果てしなく続いている。幅は広いが土の表面が地ならしたように平坦で、人馬が通った形跡は全くない。これが本当に重慶軍の兵站基地常寧に通ずる道なのだろうか。

気味の悪い森だ。北欧童話の魔女が住むという森とはこんな所をいうのかもしれない。先頭を行く篠田少尉はそんなことを考えていた。マリヤの症状が生み出す幻想の一種かもしれない。道の両側には、太い幹が曲りくねって奇妙な形をした松が無数に生い茂っている。

縦隊にならないと歩けないような細い石畳の旧道であることが多い。まして作戦上片点線路はおろか、点線路を縫って山間部を前進するとき、進路を誤まらぬよう尖兵長は蛍光塗料をぬった磁石の細い針一本を頼りに全身の神経を極度に磨り減らす。先頭にいるから何時敵の射撃を受けるか分らなかったが、そのような生命の危機感は一の次であった。この辛酸はすぐ後方を行く連絡係下士官、分隊長にも決してわかってもらつたことのない孤独の戦いであった。

さて前述のごとく九月二十日の夜、天候は雨であった。部隊は常寧への道を歩き続けていた。夜が明けてきた。雨は相変わらず降りしびいている。細い道は峠を越え尾根をつたい蜿々と続いていった。いつもならそろそろ宿営する時間であるが、馬上の大隊長はその日に限って「止まれ」といわない。雨雲が低く垂れこめているために敵機の来襲はないと見込んだのかもしれない。

歩いている者の心理としてこんな時、「今日は昼まで歩くぞ」とか「雲が低い間は歩き続けるぞ」とか、中隊長を通じて聞いておれば誰もがその覚悟で歩くのだが、軍隊はそういう風には出来ない。マラソンでもゴールがあるものだが、作戦間の行軍はゴールのないマラソンであった。ゴールと思っていたものがいつの間にかずっと遠のいてしまふやききれない幻滅感とたたかいながら、將兵ともに心身を磨りへらして歩きつづけるため、不要な疲労が大きい。そして、最もそのゴールインの瞬間を願っているのは部隊の先頭を行く尖兵長ではなかっただろうか。

常寧があらうものならもう通り過ぎていくくらいに歩いた。しかし城壁はおろか峠らしいものにも出くわさないのだ。小隊長は黙々として歩いてしたが、ふと氣を取り直すと、こんなところで敵に退路を遮断されたら大隊長もろとも一個小隊は全滅してしまふのではないかと思った。

列の最後尾を乗馬でいく山口大隊長も同じことを考えていた。しかし地図上でこの方向へ延びている道は絶対にこの一本しかないのだ。方角から考えても他に道のありようがなかった。しかも、農夫が野良仕事に通う畦道ならいざ知らず、これは軍用トラックでも走れる堂々たる道路である。

「健部隊は二十二日までに常寧に進出の見込みがついた」とすでに師団は軍に対して打電している。氣も急いでいた。今日の午前中、夜が明けてからも行軍を続けたのはそのためである。それに、道が違ふのなら違ふという確認をしておきたかった。

ふと見ると小隊長が小隊をやりすごして道路脇に立って待っている。

「どうしたんだ？」

「この道は少しおかしいと思います」

大隊長は前進を命じた。心なしか小隊長の顔がさえず、先頭まで走りながら戻っていく足どりが重い。マリヤのことは聞かされていなかったから連続勤務のためにむくれているのかもしれないと思った。

砲声はおろか一発の銃声さえ聞こえてはこない。森の中は静まり返っていた。馬の上から見てみると、前を行くカーキ色の

一個小隊が今にも薄暗い森の中に吸いこまれてしまっている。

次第に空は赤味を帯び、松の梢をわたる風も夕暮れの近いことを知らせていた。尖兵であった一個小隊を休む間もなく護衛につれてきた。ほかの小隊でもよかったと思う。日が暮れたらこの兵たちは、炊爨と兵器の手入れでほとんど眠るいとまもなく夜の行軍に出発しなければならないのだ。

作戦間の兵の悩みは数えきれないほどある。それはつねづね大隊長が見たり聞いたりしている程度のもではないようだ。士官学校出身の大隊長はそれを知りたいと思うけれども、そのことごとくを知り尽くすことは恐らく不可能に近いであろう。そして、各級指揮官の悩みも。

先頭を小隊長が行く。誰にもいえない悩みはしかし大隊長にもあった。：常寧への道は今夜の尖兵中隊が搜索しているはずであった。そう思うと山口少佐はようやく引返す決心をした。

その夜ふけ、三時に起床して、部隊は常寧の北をまわる道を利用して泉城西側の高地へ移動した。しかし龍門隘の付近を通過する時には道とはいえないような箇所も処々にあり、川水が岩の間を流れている中で蠟燭をつけた尖兵中隊の下士官が一人、足元を照らしてくれていて辛うじて岩つたいに渡っていけるようなところもあった。篠田少尉はその前夜尖兵長として雨の中を十八時間歩きつづけたため、到頭宿営とともにマラリヤを起こしてしまったのであったが、タイミングよく護衛小隊の命令を受けたため、再び心身ともに緊張しマラリヤ原虫の方が思惑がはずれて退散してしまっただけ。

つ鋭気を養うわけであるが、その十日間は哲学的に、また宗教的に、死生観に真つ向うから取り組んだ一生の中でも貴重な時期となった。

石川連隊長は當時を回想して次のような手記を残している。

「師団長に対して意見具申した。

1、拙速を避け準備を十分にするため十数日の余裕を与えられし。城壁爆破のため爆薬および師団工兵隊の協力を要す。

望む。

2、敵は孤立無援だから特に攻撃を急ぐ必要はあるまい。準備を十分にしておいて殲滅を図りたい。

ところが師団長より次のように返答があった。

1、攻撃は急ぐ必要はない。準備を十分にせよ。

2、工兵および爆薬は送れぬ。

そこで連隊は独力常寧を攻撃するに決し、大要左の如く処置す。

1、主力をもって常寧西側を西方より攻撃。一部Ⅲ（二個中隊欠）をもって常寧東側より攻撃せしむ。

2、企図を秘匿するため、夜暗を利用して主力を西側高地西方谷地に移動し、敵情地形の偵察を続行

したが、幸い我が企図を敵に察知されることもなく攻撃を準備することが出来た。この間、敵は常寧西側高地の陣地を逐次増強拡張するのが目撃されたが、これは敵主力が占守防禦から攻勢防禦に移ることを意味するので、連隊としては城内に立て籠られるよりはむしろ私の望むところであった。というのは、増強中の陣地はさほど堅固なものとは思われず、山砲をもって充

さて常寧西側の高地に来て夜が明けてみると、眼前に展開した光景に誰もみな驚いた。

腕を伏せたような丘が三つ見える。距離約千米。高さ約三十米。しかもその向うにさらに同じような丘が幾つか重なっている。そのどれもが完全な陣地になっていた。要所要所に築かれたトーチカ、山頂を取り巻く長い柵、その材料の丸太ノ棒は電柱のように太い。外周にはさらに鹿岩がめぐらされている。なるほどこれでは第三師団も攻めあぐんだことだろう。われわれも下手をするところが最後の地になるのではないかと思った。

重なり合う丘陵の一番南の端に、一きわ高く岩山が巖々として天を突くように聳えている。地図上鷲湖嶺とあるのはこの岩山をさすものらしい。ロッククライミングの専門家ならいざ知らず、武装した軍隊には登頂不能と思われ、敵もさすがにここだけは陣地占領していなかった。

敵陣地までの間は谷地となり雑草が深く生い茂っており、重量たる丘に阻まれて常寧泉城はその城壁の一部をさえかき見ることが出来ない。どの陣地の上でも百人以上の敵兵が蟻のようにせせと壕を掘り、土を麻袋に詰めてさらに陣地を補強していた。

第五中隊は丘の反対斜面の小部落で、小隊ごとに宿営した。やがて連隊長から命令があったらしく、中隊長を通じて全員に次のように伝達された。

「攻撃は約十日後に実施する。それまでよく休息して鋭気を養っておくように」

日に日に堅固になっていく陣地。それをいたずらに遠望しつ

分破壊し得るものと信じたからである」

石川手記によると師団長は工兵隊の協力を拒絶しているが、連隊の攻撃命令となった大傑作命令第一〇〇号には「第一大隊（工兵一小隊属）は右第一線となり云々」とあり、実際にも工兵隊金澤徹郎少尉が一個小隊を指揮して第四中隊と一緒に突撃し、また工兵一個班が第九中隊の攻撃に協力しているので、その後状況の変化があったものと思われる。

鋭気を養う十日間は意外に長く感じられた。第八中隊が宿営した部落の前に大きいクリークがあった。長沙付近からつれてきた陳という青年が、そのクリークに入って手づかみで四十糎ほどの魚をとってきて天婦羅にした。二十才くらいの瘦形の男がよく気がつくので兵隊に可愛がられていた。

また第五中隊の宿舎の裏手にも大きい池があり、草魚または家魚と呼ばれる河鱒に似た魚が多数泳いでいた。初めは手榴弾でとっていたが、しまいには土手を壊して池を干し、大量に生捕りにしてもりもりと食べた。中国の淡水魚は生食すると寄生虫がわくとか、肉腫が出来るとかいわれていたが、十日後に総攻撃をひかえた身にはあまり気にならず、刺身にしても大いに食べた。

そのほかニンニクもよく食べられた。鋭気は十分に養われたようである。第五中隊長松下正克中尉は毎日ニンニクを食べたおかげで、第一日目に分哨へ視察に行く時には山の途中で一度休憩しなければならなかったのに、一週間目には休憩なしで登れるようになったとその効用を大いに礼賛した。

その松下中隊長も陣地の攻撃は余程心配だったらしく「どう

したらあの柵の中へ入れるだろうか」とか、「攻撃の夜は暴風雨になればよいのに。敵が目もあけていられないくらいにドシャ降りに降ったら、突撃するまで気づかないだろう」とよくいつていた。攻撃は夜襲と誰もきめこんでいたようである。山口大隊長もよく中隊の位置へ雑談に来ていたが、中隊長がそういうと「雨が降るとまずいんだ。土砂が銃口に入ったりしてね、射撃出来なくなるんだよ」と上機嫌で話していた。

十日間の休暇を軍医さんにも有効に使っていた。第二大隊では林寧豊軍医中尉と岸川一郎軍医少尉が手分けして、各中隊の小隊の位置まで巡回し全員の健康診断を実施した。さらに兵を集めて衛生講話も行った。「蠅を取れ。それで伝染病は防げるのだ」と二人の軍医は力説して回った。その地方は蠅が特に多くて、茶碗の中の飯は蠅がたかって白いところが見えなくなるくらいなのを、箸の先で払いのけながら食べていた。命がけの総攻撃の日を目前にして何の健康診断や衛生講話かとも思われたが、最後まで体を大切にするという考え方のほうが、淡水魚を生まで食べる無謀さよりも矢張り正しかったようである。

やがて「嵐の前の静けさ」ともいうべき十日間はすぎた。九月二十九日の午後、連隊長は攻撃中隊の小隊長以上を台地の一角、敵からは見えない樺の木立の蔭に集合させると、開口一番「攻撃は明三十日黎明を期して開始する」と宣言した。十分に敵情地形を偵察して、攻撃計画を練りに練った石川大佐の顔には自信が満ち溢れていた。集合した青年将校たちはその顔を見た瞬間、常寧県城は確実に攻略できると直感したのである。

「攻撃開始はあの山の上から行う」

連隊長が登るのに若い小隊長達が遅れるわけにはいかない。岩を攀じて山頂に達したのは約一時間後であった。登ってしまふと錐の先のように見えた山頂も案外広く数個中隊が攻撃準備することも可能であることがわかった。尖って見えたのはある角度だけから見えていたからである。しかし峻嶒であることには変わりはない。箱根山ではないが「一夫関に当るや万夫も開くなし」である。若し敵が一個分隊でもこの山に配置していたならば、常寧攻撃の経緯はまた異なったものになっていたであろう。

山頂はまさに豪華な展望台であった。敵陣地は眼下にパノラマのようにひろがっている。直径五百十米はあるだろうか、碗を伏せたような山が五つ、六つ、ようやく傾きかけた秋の日をうけ濃い陰影をつくり並んでいた。平和な時代ならさしずめ大和三山、敵傍山や天香具山にもたとえられる美しいはずまいであろうが、どの山も大規模な工事を施され、陣内に縦横に掘り返された壕のために無残なばかりに傷ついていた。さらに鹿岩と丸太の柵で頂上付近は取り囲まれ、随所に構築されたトーチカは威嚇するような黒い銃眼が八方に睨みをきかせている。そして問題の常寧県城はそれらの陣地に護られるように、斜め右後方のところに長々と斑らの城壁をめぐらして、大蛇のようにとぐるを巻いていた。

連隊長は大声で敵陣地にヤギ、シカ、ウマ、イヌ、ネコ、サルと名をつけていった。「ヤギ陣地は第十二中隊が攻撃。シカ陣地は第四中隊、ウマ陣地は第三中隊が攻撃する。ネコ陣地は第八中隊、サル陣地は第五中隊、イヌ陣地は第一中隊が攻撃せ

連隊長は右腕をあげると、南の空に突立っている鷺湖嶺の尖った頂を指さした。これには居並ぶ将校たちも思わず目を丸くした。あんな峨々たる岩山に登れるのだろうか。敵も登っていない峻嶒である。岩は苔で青く光っているではないか。しかし連隊長は平然として続けたのである。

「これから現地に行って各隊の攻撃目標を指示する」胸を張って秋晴れの空の下を歩き出した。陸士二十八期、当時五十才。百戦錬磨の連隊長の面目躍如たるものがあつた。各中、小隊長も秋草を踏みながらそのあとに続いた。

敵は日本軍が現在集結している地点から攻撃してくると思っているだろう。「敵の意表に出づるは機を制し勝を得るの要道なり」と作戦要務令の綱領は教えている。本当に登れるのなら、鷺湖嶺からの攻撃はまさに敵の意表を突くものである。

鷺湖嶺前面の敵陣地と常寧県城



よ」

各中隊長、小隊長はそれぞれ自分たちが攻撃する陣地をじつと唇をかむようにして凝視していた。

第六中隊、第十中隊は予備隊であつた。

なお第二中隊は、中隊長鎌田吉祐中尉が萍郷県上埠で負傷後、平石中尉之を指揮し、さらに同中尉が来陽で負傷後、第一小隊長生瀬芳和少尉が中隊を指揮し、師団司令部直轄となっていた。また第七中隊（中隊長杉浦裕中尉）は水口山付近と湘江河岸の松柏の警備を命ぜられすにその部署についていた。

連隊長は更に攻撃の細部について説明していった。

各攻撃中隊は、夜半それぞれ攻撃を命じられた陣地の前面一百米の地点に進出し、玉川支隊、師団砲兵隊および第二一六連隊、第二一七連隊の連隊砲、大隊砲の攻撃準備射撃の開始を待つ。砲撃が開始されると敵陣地に近接、それ以後突撃支援射撃の最終弾に膚接して敵陣地に突入する。

これは作戦要務令第一三九条にある歩砲協同の陣地攻撃である。しかし実戦では相手も生きた軍隊である。智将がおり勇敢がいるだろう。どんな予期せぬ手段に出てくるかもしれない。た。

鷺湖嶺の崖のすぐ下に第八中隊が攻撃するネコ陣地が見下ろされ、その向うに第五中隊が攻撃するサル陣地が横たわっていた。

連隊長の説明は続く。第八中隊が黎明攻撃でネコをとったあと第五中隊はネコまで進出、ネコを拠点にしてサルを攻撃する。イヌ・ヤギ・シカ攻撃の各中隊は、黎明を期してほとんど

同時に砲兵の攻撃準備射撃開始とともに前進。前述の要領で敵陣地に突入。シカが占領されるとそれを拠点にして第三中隊がウマを攻撃する。第九中隊、第十一中隊はイヌが第一中隊によって占領されたあと常寧東城南の望楼を攻撃する。

従って第三、第五、第九、第十一中隊はそれぞれ昼間の陣地攻撃の予定と決まった。

やがて連隊長の命令で誰もが写景図をかく。明朝黎明攻撃をするため、下士官や兵士達はこの敵陣地の関係位置を見る機会がないからである。

第五中隊の篠田少尉の横で第八中隊の佐藤准尉が鉛筆を走らせていた。描き終った篠田少尉は何気なくのぞきこんだとき佐藤准尉の鉛筆が折れた。篠田少尉は自分の鉛筆をさし出した。

「ああ有難うございます」

准尉は丁寧な礼をいって鉛筆を受けると黙々として描きつづけ、そしてまた頭を下げると丁寧な礼をいって返した。気の強い人で、平素は幹候出身の少尉には敬礼一つせぬ准尉が、この日にかぎって人なつこさがありどういふわけかひどく親しみを感じたのであった。

玉川支隊と師団砲兵隊の山砲、それに二つの連隊の重火器はすでに鷲湖嶺の上に陣を布き、明朝の射撃の準備を始めていた。連隊長の説明が終って将校たちが下山しようとしているとき、連隊砲の試射弾の第一発が物の見事にイヌ陣地のトーチカに命中した。

その夜半、各中隊は連隊長に指示された地点に向って敵に企図を秘匿しつつ前進して行った。第八中隊は全員暗闇の中を鷲

橋のところから道は南に折れる。城門までの距離約二百米。

道の両側には店舗が続き、いわゆる商店街で、多くの料理店もならんでいる。ほとんどの家の中にはまだ小とぼしが残っており、直前まで人がいた気配である。道路の上には家の中から持ち出した家具類でバリケードがつくってある。どのバリケードも身長より高いので、その一つ一つを排除して前進するにはかなりの時間がかかった。城門までの間にそんなバリケードが四カ所あった。

二十四時、北門に到着する。門は黒い鉄の扉がしまっていて押ししても開かない。敵影はなかった。城壁の高さは約五米。先頭の五、六人が肩車で城壁の上にあがる。城壁の上は幅約三十糎。城壁は赤煉瓦製であった。

城壁の中の市街は燈火管制をしているのか真暗で、総攻撃の前夜とはどうしても信じられないくらいに静まりかえっている。人っ子一人通らない死の街である。

城門の上だけ少し広がっており、そこに小隊長の命令で軽機関銃座一つと小銃銃座五つをつくることになる。材料は民家にある土煉瓦で、それを闇の中でリレー式に送った。城壁の上にいる尾崎一雄軍曹や山田良七軍曹のところに「ハイ」「ハイ」という煉瓦リレーの合図の小声が聞こえてくる。

作業が終わる全員城壁の外の広場で点呼をとり、各分隊長は人員を掌握した。その時、突如二発の銃声が起ったのである。すわ敵襲とばかりに全員が緊張したが、それは便衣を着たる敵兵二名が、城壁の上からハシゴを下ろして脱出してくるのを、森少尉が発見、拳銃で射殺したのであった。二名は地面に

湖嶺にのぼり、横隊になって前進の命令を待っていた。第一線は佐藤准尉の第一小隊である。第八中隊のうしろには第五中隊がすでに到着して、これまた横に散開して待機していた。

その数時間前、すなわち九月二十九日の二〇時頃、第六中隊第一小隊長森正親少尉(57)は大隊長から常寧東城北門付近の敵情偵察を命じられていた。第六中隊は予備隊であったが、新たに部隊に追及してきたばかりの陸士出身のこの若い将校のために、大隊長は活躍の場を与えてやろうと思ったのかもしれない。

将校斥候要員として中隊から次の四個分隊を編成する。

第一分隊 分隊長 尾崎一雄軍曹
第二分隊 分隊長 山田良七軍曹
第三分隊 分隊長 進藤 豊軍曹
第四分隊 分隊長 樽岡義雄軍曹

二〇時、小隊は宿営地出発。畦道を北に向って前進した。やがて常寧川にかかっているコンクリート製の橋のところまで来た。橋はその幅二・五米、長さは二十米ばかりで、水面上約一米のところにかかっていた。欄干はすかしになったアーチが左右に幾つか並んでいて仲々スマートな造りである。

対岸、橋の左たもとにトーチカがあり、その中に灯がともっているのが銃眼ごしにぼんやりと見える。敵の銃撃にそなえ、全員ひそかに匍匐で橋梁を通過する。通過し終わると一斉にトーチカの裏側から突入したが、意外にも中に敵兵の姿はなく小とぼし(茶碗の中に桐油をいれ布切れを浸して燈火をつけたもの)が一つ音もなく燃えているばかりであった。

落ちて呻き声をあげている。

恐らく彼らは、日本軍の総攻撃が数時間後に迫っているのを知って逃亡をはかり、城壁の上から森小隊を見てもまさか日本軍だとは気がつかず、同じく逃亡をはかった自分たちの仲間だと勘ちがいして、早くその一団に加わろうと急いでハシゴを下りてくるところだったのであろう。

尾崎軍曹は念のためこのハシゴを使って数人の兵士とともに城内に入り、搜索してみたが敵の姿は見当たらなかった。

北門付近に敵はいないと判断した森少尉は午前二時頃同じ道を引き返した。橋梁を通過して少し行くと連絡のためにおいてきた小隊の兵士が七人、道路の左右に三十米ばかりの間隔をとり、藁で全身を偽装して待っていた。

午前三時、宿営地に戻る。大隊長が来ていた。森少尉は「北門付近を搜索しましたが敵はおられません」と報告する。

「敵は居らなかったか？」

と大隊長は信じられないという風に首をかしげ、

「では、また外の中隊に搜索させよう」

独り言のようにいった。

それを聞くと森少尉は厳しい表情になり、

「その時は森にもう一度行かせて下さい」

と青年将校らしい一本気な口調で訴えていた。

そのあと小隊は宿舎前で飯盒炊餐を行い、食事を終ったのは午前四時頃であった。

その頃、第十二中隊はすでに常寧東城西北、ヤギ陣地の手前

二百米の地点に進出していた。中隊長長谷川亘中尉は前日砲の観測所で射撃の打ち合わせを行い、日が暮れてから敵方斜面を隠密に下ってきたのである。全員完全防音で徹底的な偽装をしていた。ヤギ陣地は敵陣地群の最左翼。その右が第四中隊攻撃のシカ陣地である。陣地の前面にはほぼ東西に凹地が横切っており、凹地の底は幅五十米の水田になっている。全員水田のきわに壕を掘る。

夜半、熊取准尉を長とする将校斥候が敵陣地の偵察を行ったが、敵は全く中隊の近接に気付かぬ模様であった。

静寂の中の孤独を噛みしめながら、中隊は攻撃を前にして天明を待った。

地平線がうっすらと白み、低地から見上げる稜線に黒い敵兵の影が動いている。

やがて後方鷲湖嶺の上に砲声がとどろき、敵陣地の上で掩蓋銃座が吹っ飛んだ。天地の静寂は破られ一瞬にしてあたりは轟音の巷と化した。第十二中隊の長谷川亘中尉と連隊砲中隊戦砲第二小隊長の横文二中尉とは陸士の同期であった。連隊には山砲隊が協力していたけれども、石川連隊長の深い配慮で第十二中隊の援護射撃は特に横中尉に命じられ、両者の連繫の緊密をはかられた。

連隊砲の射撃とともに鹿砦の間に少しずつ突破口が開かれていった。中隊長は予定通り一個小隊を掩護のために残し、二個小隊を率いて発進、水田を走った。右第一線は谷垣曹長の指揮する第二小隊、左第一線は熊取准尉の指揮する第一小隊であった。右の二つの陣地から側防の機関銃が横なぐりに射ってきた。

「っ」とやった。これを三度ほど繰り返しただろうか。もうよからう、今度こそ突込むぞと小隊長は突撃を敢行したが敵の手榴弾は無尽蔵で、またもや手榴弾は周辺に炸裂し、陣頭にいた長谷川中隊長は渦巻く硝煙の中で右脚に衝撃を受けて転倒した。鹿砦の破片でも当たったのだろと再び走ろうと立ち上がったが、足がいうことをきかず横倒しに倒れて走れなかった。谷垣曹長が中隊長を窪地に引きずり込んだ。草脚絆の上からでは傷口が分らなかつたが、靴の中は血の海になっていた。

中隊長負傷のため熊取准尉が中隊の指揮を執り攻撃を続行、第一小隊は第一分隊長河内瑞義軍曹が指揮する。勇敢な敵兵が掩体の上に仁王立ちになって腰だめでデコ式軽機を射って来た。こちらも九六式軽機で射り返す。チェコの弾倉は二十発、九六は三十発、日頃重いとこぼしていたこの銃弾十発の差がチェコを制した。弾倉が空になった敵兵はいたまらずに逃走した。

中隊長代理熊取准尉は突破口めがけて第二回目の突撃を敢行した。突破口のところで一、二小隊は合流し潮のように陣内に突入した。陣内の敵は遂に算を乱して北方に遁走。かくて中隊はヤギ陣地を完全に占領した。

この戦闘で右の側防重機を制圧せんものと、勇敢に応射していた第二小隊の軽機関銃手紀田春雄上等兵は、口から後頭部への貫通銃創のため壮烈な戦死を遂げた。戦死時刻は十三時三十分であった。長谷川中隊長は手榴弾の破片四つを右脇下から足にかけて浴び、右脚に入った破片は骨にまで食い込んでいた。一番大きい破片は水筒にあたってらしく、身代りになった水筒

た。銃弾が周辺の水田に飛沫をあげる。将兵はただ走りに走る。敵陣地の斜面にとりつき一気に駆け登る。鹿砦の外側を取り巻くようにして壕があった。飛び込んで駆け上ろうとしたが、掘ったばかりのところに雨が降ったせいか、土が柔かくて手をかけてもずるずる崩れて上がれない。ひょいと横を向いて驚いた。壕の中を側射する銃眼がこちらを睨んでいる。思わず元の位置へ飛び出す。残念ながら攻撃頓挫。

右のシカ陣地から敵の側防機関銃が唸りをあげて火を吹いた。第二小隊の軽機関銃手紀田上等兵が向きを変えて応射する。台地後方上の砲兵陣地から心配そうな顔がのぞいている。早く壕を越さなければならぬ。連隊砲が再び援護射撃を始める。すでに攻撃前進しているので中隊の第一線と敵との距離は五十米あまり。鹿砦までは二十米ぐらいしかない。連隊砲弾の落下で土砂を頭からかぶるほどに接近していったが、砲撃の腕前は見事なもので歩兵の第一線すれすれのところに砲弾は命中していった。

壕は戸板がないと渡れない。今朝発進した位置に民家があった。その戸板をはずしに兵が走った。敵の側防機関銃が射ちまくる水田を越えて戸板が運ばれる。これを壕に渡し発煙筒二、三本を壕の中の機関銃の前にたたき込んで、今度は一気に突破口から鹿砦の内側へ飛び込んだ。

ところが今度は手榴弾の雨である。文字通り雨が降るように手榴弾が飛んでくる。突撃発進一、二度。その都度無数に手榴弾が飛んできてまたまた突撃頓挫する。

各小隊は偽喚声をあげる。伏せたまま「突撃に―進め」「わは馬に蹴られたように凹んでいた。

谷口伊三郎上等兵も敵手榴弾のため負傷、後送されて手当を受けていたが遂に戦死した。

また連隊砲陣地にも敵の迫撃砲弾は落下していた。第十二中隊の攻撃準備射撃を実施中、飛来した敵弾の破片は連隊砲中隊の武田芳太郎一等兵の左胸部に命中、十三時二十分同一等兵は戦死した。

第十二中隊は陣地を占領してからも最左翼だったこともあって、常寧県城内からかなり激しく迫撃砲弾を射ち込まれ成矢曹長、湯浅信太郎上等兵は多数の負傷者を出した。中隊長は担架にのってそれ以後の戦闘を指揮した。

正確な連隊砲の掩護射撃は歩兵中隊の将兵を驚かせたが、これは決して偶然でなかった。正確な射撃技術を身につけるためには豊富な実弾射撃をしなければならない。一年半前の江北殲滅作戦のとき、百発の員数外砲弾を手に入れた連隊砲中隊が、靖安東方の丘陵で敵陣めがけて徹底的な実弾射撃を実施した。その成果が常寧攻撃にあらわれて、ヤギ陣地の掩蓋を初弾で吹き飛ばしたのであった。

ウマ陣地を攻撃する第一中隊（中隊長永末啓司中尉）は夜の間に陣前に潜行、ひそかに壕を掘って夜が明けるのを待っていた。第一線小隊は第二小隊であった（森岡義雄少尉が指揮する）。第一小隊は、山砲隊を護衛するため中隊を離れていた）。ところが、ようやくあたりが明るくなり、眼前に敵陣の全貌

が浮かび上ってくるにつれ、誰もが思わず目をこすって見直した。敵陣まで僅か三十米しかなかったのである。二百米前方で待機するはずのところが、小雨が降っていて見通しがきかなくなつたのだ。

敵も我を発見したのに違いない。ダダダと敵の重機が撃ってきた。軽機関銃手勝岡繁上等兵は左胸、左上膊の貫通銃創のために戦死したのであった。そして覚悟幾治一等兵もそのとき左鎖骨下窩、左肩胛部に機銃創を受けて戦死したのである。攻撃部隊がそのような至近距離で、砲兵の掩護射撃を待つことは極めて危険であった。永末中隊長は我が信号弾黒龍が上がるまで、もう少し敵から見えない場所へ下がるように指示した。砲兵隊とのとりきめで掩護射撃開始にあたっては「黒龍」を撃ち上げるようになっていたのである。

いよいよ黒龍が上がり砲撃が開始された。友軍砲弾の下をくぐって匍匐前進しながら敵に接近する。第二中隊長は植木少尉、第三中隊長は上田曹長である。遂に鹿砦際に到達。その鹿砦に砲弾が命中して次々に吹っ飛んだ。一同土砂を頭からかぶり小銃の銃口をあわてて下にさげた。土砂が入っては小銃が撃てなくなるからである。着剣する。突撃の準備もあつたが、着剣すれば少しは銃口から土砂が入りにくいだろうという配慮からでもあつた。

全員着剣して砲兵の最終弾を待っていた。永末中隊長がじつと時計を見ている。三分たてば突撃支援射撃は終るのである。誰もがじつと中隊長の顔を見つめていた。

「ソレツ」とばかりに中隊長は軍刀を閃めかせ、号令一下全

隊長の突撃の号令がきこえ歩兵が飛び出した。砲兵の射撃は一段と激しく、砲弾は黒煙をあげて敵陣に落下した。黒木中隊の右第一線は麻殖生隆二曹長が指揮する第一小隊、左第一線は柳瀬久雄軍曹が指揮する第二小隊であつた。相次ぐ激戦のため中隊には中隊長のほかもう将校はいなかったのである。その黒木中隊長も岳麓山で負傷した身である。

金窪少尉は軍刀を振り上げて怒鳴った。

「突撃にッ、進めッ」

陣地からは敵の重機が猛烈に撃ってくる。中隊も工兵隊も凹地の中を銃弾をくぐって駆けつづけた。

左側にサル陣地があつた。そのサル陣地からも射撃をうけた。サル陣地は第五中隊が攻撃することになっていたが、それは南側のネコ陣地を第八中隊が攻撃してからであつた。その時期は昼頃になるはずであつた。現在の時点ではまだ第八中隊がネコ陣地を攻撃中で、サル陣地は無傷のままで残っていたのである。

機銃弾の雨。それに手榴弾が無数に飛んできた。第四中隊の太安進一兵長は左脇腹へ手榴弾の破片をまともにくらった。物凄しい衝撃をこらえてそと手で触ってみると、被甲（防毒面）の金属性容器が碎けて中の活性炭が全部飛び出してしまつてた。

金窪少尉の横で誰かが倒れた。しかし確かめるひまはなく遮二無二走って鹿砦にとりついた。福田伍長が突破口をつくる。四中隊の兵士も各所に突破口をつくって鹿砦を乗り越えて行つた。

員最終弾に膚接して敵陣に突入した。敵のトーチカは破壊され屋根が傾いていた。その中で二、三人の敵兵が死んでいる。陣地を棄てた敵が常寧県城に向かって一目散に逃げていく。

この攻撃で前記二名の兵が戦死したほか堀尾上等兵が負傷した。同上等兵は入院下番の身であつたが、本部との間の遞伝兵として服務中に小銃で狙撃されたもので、右腕切断の重傷であつた。

また、第一中隊の攻撃を支援していた第三機関銃中隊大隊砲小隊の杉原弘治伍長と岩口正純兵長は敵の迫撃砲弾のために戦死した。

第一中隊は夕刻になって残敵掃蕩に出かけるまでずっとこのウマ陣地にいたのである。

第十二中隊が夜半ヤギ陣地前の水田ぎわで待機していた頃、その右隣のシカ陣地の前面には第四中隊が進出していた。第四中隊に配属された師団工兵隊の金窪少尉は、シカ陣地前八十米のところにある灌木地帯の中でひそかに壕を掘っていた。同行するのは福田伍長を長とする攻撃班一カ班である。ハシゴ一個、鋸、鉄條鉋などを用意した。

夜が明けてきた。殷々たる砲声がどろき、突撃支援射撃の山砲の弾着は前方のヤギ・シカ両陣地の稜線に、息づくひまもなく黒煙を噴き上げる。打ち合わせによると、突撃支援射撃は三分間ずつ三回行われる予定であつた。三回目の最終弾に膚接して敵陣に突入するのである。

第三回目の射撃が始まった。三分間の集中射撃。黒木重義中

壕があつた。歩兵も工兵もひと飛びに飛び越えて、頂上めがけて駆けあがる。交通壕の中に敵兵がいたが、日本軍の気力に圧倒されて逃げはじめた。銃剣をふるって追う日本兵。あちこちで敵兵は銃剣に刺されてあえない最期をとげていった。

この攻撃で第四中隊の一ノ瀬映純伍長が戦死した。小笠原栄之助伍長は右肩貫通銃創で戦死した。戦死時刻は九時四十分であつた。また井登善一上等兵も左肩貫通銃創で戦死した。戦死時刻は十時二十分であつた。

工兵隊の負傷者は山杉末治上等兵であつた。

玉川書簡、

「第一線歩兵の方々が、砲兵があまり射撃をしなかったと感想を抱かれたのももったいなく感じますが、実は砲弾が足りなかったのです。後方からの補給はご承知の通り望み薄、一発の砲弾でも無駄にしないようにと心掛けていました。その代り、大切な時には惜しむようなことはなかったと思います。私の指令は、三発以内で銃眼に命中しないところに陣地を取るなということでした。」

いま一つ私が真剣に訓練したことは、敵トーチカの至近の処（二、三百米）に隠密に砲を進め、蔭で組み立てて装弾（その間に分隊長、照準手は目標確認）、砲を押し出すと同時に発射、すなわち食うか食われるかの兼ね合いです。これは常寧でも私の目前で数度実施してくれました」

なおこの戦場で玉川支隊の小隊長後藤少尉は大腿部機関銃創をうけ後送された。

第三中隊は第四中隊のシカ陣地占領後、ウマ陣地を攻撃することになっていた。中隊長増永睦雄中尉は右第一線を由良曹長の第一小隊、左第一線を松下曹長の第二小隊として攻撃を開始したが、玉川支隊第一大隊長と打ち合わせた二発の掩護射撃だけで、あっという間に、鮮やかにウマ陣地を占領してしまった。鷺湖嶺からこれを見ていた各隊の將兵は舌をまき、さすがに増永中隊長と称賛した。しかしこの攻撃で塩見善一上等兵は頭部貫通銃創をうけ、また岡村伝次兵長も左胸部貫通銃創のため戦死した。

第三中隊の攻撃を掩護した第一機関銃中隊（中隊長新城利雄中尉）は、夜間すでに六銃の重機関銃をもって陣地進入していた。第三中隊のウマ陣地攻撃は十時頃であったので、それまで兵士も陣地も完全に偽装して敵に見えないように注意した。いよいよ第三中隊が攻撃前進をはじめ重機関銃も射撃を開始した。

曳光弾を使うと敵に恐怖心を与え非常に効果的なのだが、逆に我が方の位置知られて目標にされるので使わなかった。射撃にあたっては友軍の頭上を越えて射撃するいわゆる超過射撃を行ったわけであるが、その頭上すれすれに、ほとんど限界を越えるほどに射撃しなければならなかった。

中隊に戦死者はなかった。

まだ夜が明けないうちに鷺湖嶺の北側の崖を下りた第八中隊は、一先ず崖下の凹地で集結した。

の曳光弾が敵の銃眼に吸いこまれる光景は実に綺麗だ。

山砲の射撃で鹿砦と柵のところが破壊され突撃路が出ている。敵はわが銃砲撃の間隙をぬってチェコ式軽機関銃と手榴弾で応戦してきた。

後方鷺湖嶺の頂上からは、各砲兵隊と第五中隊の将校が固唾をのんでこの光景を見守っていた。

ようやく昇りはじめた太陽の光が陣地の上に射しはじめ、日本軍の鉄帽や銃剣をキラキラと輝やかせる。突破口を入ったすぐ正面にトーチカがあり、大きい銃眼が睨みをきかせていた。敵も味方も激しく手榴弾を投げ合い突破口のところで一時膠着状態となった。小隊長佐藤准尉が突然抜刀したまま突破口を駆けぬけ、あっという間に左右の敵を蹴散らすようにしてトーチカの前壁にとりついた。手榴弾を銃眼の中へ投げこんだようである。銃眼から黒煙がふき出し、小隊の兵士は怒濤のように突破口の中へなだれ込んだ。敵はトーチカの後ろに回り、トーチカを盾にしてあらん限りの手榴弾を必死に投げてきた。

准尉は軍刀を振りかざし鬼神のような姿で小隊の兵士を激励した。そのとき足元で敵の手榴弾が爆発したのだ。

「あっ准尉さんが倒れた！」

鷺湖嶺の上の人たちが口々に思わず叫んだ。

倒れた准尉が立ち上がった。一同はととした時に准尉は力なく二、三步あるいて再び倒れた。

それが佐藤准尉の最期であった。

小隊長を失って兵は怒りに燃えるように銃剣をかざして、トーチカの後ろの敵に殺到していった。さしも頑強な敵も遂に後

中隊長田村春雄少尉が押し殺したような、低いが力のこもった声で大要次のような命令を下す。

第八中隊ハ只今ヨリ前面ノ陣地ヲ攻撃スル。第一小隊第一線、第二小隊、第三小隊ハ予備隊。突撃ヲ支援スル山砲ノ最終弾ニ肩接シテ突入セヨ。

曇り空は今にも降り出しそうだ。南の風が頬を撫でる。闇の中で凹地を抜けると二、三十種の草を踏みながら進み、すぐに丸太の棒の林立する敵陣地の下に出た。星はないがぼんやりと陣地の輪廓が、夜空を背景にして浮かび上がっている。風がやみ、糠のような雨が降ってきた。昼間の偵察による所定の地点に到着したらしい。

「停止」

小隊長佐藤誠准尉が命令する。それから各分隊長に最後の指示を与えた。

敵はまだ我が行動に気付いていないようだ。小隊長の手旗が横に振られた。各分隊は右から第一、第二、第四分隊と敵陣の山裾に散開した（注、岳麓山以後米陽を経てきた激戦のため、人員の不足をきたし第三分隊欠）。あと何分かで敵陣に突入だ。鉄帽の紐をしめ直して伏せているが、前日からの緊張はどこへやういウトウトする者もあった。

夜が明けはじめた。明け方降った雨はいつの間にかやんで空が晴れあがってきた。

突然耳を劈く砲声。支援部隊の山砲が一斉に火を噴いたのだ。至近距離のこととて発射音と炸裂音が同時に起こり、百雷の一時に落ちるとはかくの如きかと思われた。友軍の重機関銃

第八中隊の攻撃するネコの陣地を
取り巻く高さ二米余りの鹿砦が
山砲の集中弾で一カ所吹き飛び
突撃路ができた。トーチカに肉

迫っていた第一小隊長佐藤誠
准尉と兵隊が二三人、陣内
に躍り込んだ。
間髪をいれず敵手榴弾が
身辺に飛来し炸裂音が
上がった。

山砲の援護射撃を
伝える准尉の近辺に
敵の手榴弾が炸裂し
准尉は爆煙に包
まれた。



第八中隊
開梁正信上等兵
紅山良弘上等兵

退をはじめ、ネコ陣地は第八中隊の占領するところとなったのである。

九時四十分、佐藤准尉が戦死したとき赤尾兵長、永嶋上等兵も敵手榴弾のために負傷した。佐藤准尉は戦死直前、苦しい息の下で第一分隊長坂上伍長に小隊長代理を命じ、我に構わず突込みと指示、小隊は各分隊長以下火の玉となって壕内に躍り込んだのであった。

第八中隊第一小隊第四分隊に所属していた加集唯一氏は、戦死した佐藤准尉のことを次のように回顧する。

「重傷を負った小隊長佐藤准尉は、田村中隊長らに見とられながら鬼神も泣く壮烈な最期を遂げられたと聞く。戦友の屍を乗り越えて征くは戦場の常とはいえ、上司の最期を見届ける暇もなく突撃せねばならない余りにも厳しい現実、戦い終り小隊長の最後を聞いたとき、小隊員一同声をあげて男泣きに泣いた。

身長はあまり大きくはないが肩幅が広く、厚い胸、四角張った顔。大きな口はいつも真一文字に結び、眼鏡の奥の眼は慧々として輝いていた。潔癖で几帳面。いい加減なことは許さない。長年の経験から戦闘には自信をもっており上官から良く信頼されていた。常德作戦の新聞の夜襲、今次作戦の達磨山の黎明攻撃ならびに常寧の陣地戦など、主たる戦闘には何時も第一線を承りよく戦果を収めていた。

また負けず嫌いの性格は銃剣術などで「何ノ何ノ」といって鋭い直突を繰り出し、相手を負かして「次ノ」といわれても、兵隊は尻込みするほどであったが、平素は人事係として兵隊の

面倒をよく見られた。常德作戦のとき我が部下に事故者が出た時など、宿営すると直ぐ蔭に呼んで優しく慰めまた励ましてくれた」。

第六中隊の第一小隊（小隊長・森少尉）は、北門付近の敵情報から帰ってくると、宿舍前で飯盒炊爨して食事を終わったのは午前四時であった。その時森少尉は大隊長から「シカ陣地の北方にある丘陵を占領せよ」という命令をうけていたのである。小隊は将校斥候の時とちがって本来の編成に戻っていた。すなわち第一分隊長・山田良七軍曹、第二分隊長・進藤豊軍曹、第三分隊長・長谷五平軍曹である。小隊はまだ夜の明けない鷺湖嶺北側の道を通って出発、第八中隊が攻撃するネコ陣地の前面の凹地に進出して待機した。

ところが夜が明けそめてきたとき、一同、ネコ陣地を眼前に見て思わず眠気が吹っ飛んでしまった。三十米ばかり（八階建てのビルとはほぼ同じ高さ）の丘がすぐ目の前に居座わっている、頂上付近には堅固なトーチカがあり、その前面を鹿岩や柵が取囲んでいる。そしてその中腹を第八中隊の将兵がひしひしと敵陣地に迫っていくのである。

やがて左後方から大隊砲と思われる友軍の砲撃が起こり、鹿岩の一部が破壊された。すると間髪を入れず、今度は右後方から別の大隊砲が砲撃した。十字砲火とはこういう現象をいうのだろうか。破壊された鹿岩の後方にある柵の材木が空中に跳ね上がり、忽ち突破口を開いたのである。

敵が必死に投げ下ろす手榴弾の網の目をくぐるようにして、

森小隊の全員は前方ウマ陣地の頂上に、二発の友軍の砲弾が炸裂するのを見た。玉川支隊の山砲が第三小隊の突撃支援射撃しているのである。そこで森小隊の軽機関銃も、ウマ陣地のトーチカに向かって掩護射撃を行った。第一機関銃中隊と思われるが、重機関銃も近くの丘陵に陣地進入しているらしく、しきりに掩護射撃をしている。

側面から見ているので状況はよくは分らないが、手榴弾の炸裂音が頂上付近で一しきり起こりやがて陣地は静かになった。ウマ陣地は占領されたと判断した森少尉は、各個躍進で山茶花畑を出るよう命じた。ウマ陣地の西側を通り小隊はイの陣地に向かって攻撃前進を開始した。

陣地の鹿岩にはすでに友軍の砲弾によって突撃路が出来ており、全員その突撃路を通って突入した。陣地に入ったとき敵はすでに撤退したあとであった。

小隊が陣地配備を行っている、土肥中尉が指揮する第六中隊の主力が追及してきた。

鷺湖嶺の上で待機しながら、第八中隊の戦闘の一部始終を見守っていた第五中隊は、ネコ陣地が占領されると崖を下りて進出してきた。ネコ陣地を拠点にして、北方にあるサル陣地を攻撃するためである。時刻は十時を少しまわった頃であった。

第五中隊長松下正克中尉の攻撃計画は次のようであった。第一小隊（小隊長・篠田恭一少尉）は右第一線となり敵陣地の右前方より突入。第二小隊（小隊長・西川善雄准尉）は左第一線となり敵陣地の左前方より突入。第三小隊（小隊長・仲森

森小隊の将兵は瞠目してこの光景を見た。そしてその小隊長の傷の少しでも浅からんことを祈りながら、ネコ陣地を右に迂回して自らの任務に向かって進んでいったのである。「ワッ」という喊声か陣地の上から聞こえてくる。いよいよ、突撃したなと思う。

それから、第一中隊が攻撃中のイヌ陣地を右手に見て、小隊は山茶花畑にとりついた。そこは昼頃に第五中隊が攻撃することになっているサル陣地の北方にあたるのである。山茶花は白に薔が少しふくらんで、やがて晩秋になれば清楚な花を一面に咲かせる準備をしていた。その茂みだけは平和郷のようになごやかで、吹いて来る風も特に爽やかに感じられる。

魂散らす白山茶花の白しづか

第一分隊長山田軍曹はそんな俳句を思い出していた。森少尉はそこで、前方シカ陣地とウマ陣地の間を通して見える鹿岩のある丘を指さし、「あの丘をイの陣地と呼ぶ。小隊はイの陣地を攻撃する」といった。ウマ陣地から小銃弾が飛んできた。その頃シカ陣地は第四中隊がすでに攻撃を終り占領していたが、ウマ陣地はシカ陣地を拠点として第三中隊が攻撃するところであった。

三郎曹長)は予備隊となり第一小隊、第二小隊の後方を前進。

第五中隊の突撃支援射撃の担当は、越海慶蔵中尉が指揮する歩兵砲中隊の戦砲第一小隊であった。黎明攻撃の各中隊とはちがって支援射撃についての時間的な取り決めは特にしなかった。その代りに中隊指揮班と越海小隊との間に約三十米間隔で遞伝兵を配置した。

松下中隊長が攻撃命令を与えているとき陣地には第二機関銃中隊(中隊長・横山三男中尉)が進出してきた。横山中隊長はハンサムな人で、性格はやさしくしかも危地に臨んでも平静そのものだった。その時もこれから模擬戦でもやるように、屈託のない顔に微笑を浮かべながら第五中隊の兵士を激励していた。

敵陣地は直距離で約二百米。他の陣地と同様砲を伏せたような山で高さは三十米ばかり。頂上に堅固なトーチカがあつて黒い銃眼が生き物のように凄い。トーチカを取り巻く丸太の柵や鹿砦が角か棘のように見えて、さしずめ陣地全体が巨大な一ツ目の怪獣である。

第五中隊は丘の右側面に第一小隊、左側面に第二小隊が攻撃前進を準備していた。各小隊長が命令を与え終わるや、西川准尉の第二小隊が早くも敵方斜面をまっしぐらに駆け下りて行った。続いて第一小隊も駆け下りようとしたが、斜面には機銃弾が夕立の飛沫のように無数に土を跳ね上げていた。ここを駆け下りたら全員体は蜂の巣のようになるだろう。小隊長の篠田少尉は急いで両手を広げると小隊を止め、敵陣地を双眼鏡で偵察した。撃ってくるのは正面の銃眼だけだ。あれを制圧すればよ

兵長。初年兵教育の助手をしたこともあるだけに腕前は確かだ。

「攻撃前進！」

軽機の発射音を背中に聞きながら、第二の広口兵長になるなよと心に折りつつ、小隊は全員敵方斜面を駆け下りた。

敵陣地の真下まで来た。死角になっているから敵弾はここまでは絶対に来ない。

「各分隊異常ないか」

第一分隊長中西正雄軍曹、第二分隊長松井辰雄軍曹、第三分隊長松岡美好軍曹がそれぞれ異常の有無の報告をする。広口兵長負傷、梅田兵長、沢田上等兵が軽機関銃を射撃中のほかは全員無事にここまで来ていた。

第二小隊はすでに大分上の方まで登っている。遅れをとってはならなかった。

「さあ、登るぞ」

小隊長を先頭にして小石の多い急斜面を匍いのぼりはじめた。すでに負傷者を出したとはいえ全員志気旺盛だった。九月も末だというのに小石が日光に焼けていて、手のひらが火傷するくらいに熱い。戦闘の熱気がそうさせるのだろうか。

「手榴弾が来るから気をつけろ」

小隊長が警告する。黎明攻撃とちがって敵は十分にこっちの行動を承知している。白日のもと、企図を秘匿するわけにはいかない。実力と実力の勝負である。幸い背嚢は全員後方においているので動作は軽快だった。誰もが思う存分自分の実力を発揮できるという気になっていた。

い。豪胆無敵な軽機関銃手広口兵長の顔が目につく。

「広口兵長前へ」

「へーい」

およそ緊迫した状況とは場違いな声を出して、広口兵長は軽機を片手に下げて弾薬手の沢田上等兵とともに小隊長の位置まで出て来た。

「あの銃眼を撃て！」

「へーい」

広口の鮮やかな射撃で、目の前の機銃弾の弾着はスーッと拭ったように姿を消してしまった。

「攻撃前進！」

小隊長は大声で叫ぶと斜面に飛び出した。そのとき中隊長が怒鳴ったのだ。

「待て！ 広口がやられた！」

見ると広口兵長は顔を地面に伏せて足をばたばたさせている。

「広口、しっかりしろ！」

篠田少尉、梅田兵長、藤崎兵長らが思わず走りよって顔を仰向けて見ると、白眼をむいていて何か物をいおうとするが言葉にならない。鉄帽の頂辺に穴があいていて、急いで鉄帽を脱がすどどと血が溢れ出てきた。

「衛生兵前へ！」

指揮班から上田衛生兵が走って来た。

「軽機は梅田兵長、頼んだぞ」

第一分隊の一番だが、かつては軽機関銃手であった梅田兵

すでに西川准尉の第二小隊は陣地の中腹にまで登っていた。

少しずつ頂上の丸太の柵のあたまで見えてくる。いよいよ敵は近いという気がする。その時、柵を越えて柄付き手榴弾がボーフラのように尻尾をふりながら落ちてきた。それとばかりに移動すると轟然と地響きを立てて炸裂する。ああ無事だったと上を見ると、また別の手榴弾がゆらゆらと落ちてくる。ところである。またそれを避けるために全速力で移動しなければならぬ。しかし陣地が近づくにつれてそんな悠長なことでは間に合わない。柵のかげに手榴弾兵が身をひそめていて、狙いをさだめて直撃してくる。

先頭の西川准尉はその硝煙を縫うようにして前進して行く。各分隊がそれに続いた。

突然、頭上に異様な炸裂音が起こり、砲煙とともに丸太の棒が数本、青空高く舞い上がった。空中でマツチの軸のように縫れ合つと、丘の左側の斜面をカラカラと音を立てて転がり落ちていった。西川小隊長が見ると立派に二米ばかりの幅の突撃路が出来ている。その手前の鹿砦も黒く焦げて跨いで入ることも困難ではない。

「ようし！」

小隊長は決意も新たにその突撃路を目標に進んで行った。続いて右第一線篠田小隊の前面にも砲弾が命中、同じように丸太の棒が吹飛んで突撃路が開かれるのが見えた。

後方驚湖嶺の上でこれを見ていた山口大隊長は副官三谷健一中尉にいった。

「第五中隊の兵で日章旗をもっている者は背中につけさせろ」

副官はそれを六号無線分隊長の寺本満伍長に伝達した。敵陣地の大ききからみて突入したあとの陣内戦が長びくことが予想された。そのため大隊長は第一線表示の必要を感じたのであった。第五中隊に連絡を終えた寺本伍長は、敵陣地の前面に日章旗が二つ三つと花のように開いていくのを見た。緊迫した状況下にも、それは美しい光景であった。

西川准尉は突撃路まであと十歩あまりのところに來ていた。

柵の向うから敵兵の興奮した甲高い声が聞こえてくる。手榴弾投擲はいよいよ熾烈になった。その時、すぐうしろで「やられた」と声がした。驚いて振り返ると第一分隊長の井川金之助軍曹が左眼をおさえていた。

「どうした？」

「やられました」

敵前数米。介抱しているひまはなかった。井川軍曹は自分で傷の手当てをすると後退していった。この傷で同軍曹は永久に左眼の視力を失うことになった。

いよいよ突撃の時期である。准尉は軍刀を抜いた。全員着剣する。しかしこの激しい手榴弾の状況から判断して、無理な突撃は損害を多くするばかりだろう。井川軍曹の負傷のために消極的になったわけでは決してなかったが、准尉はあえて慎重な方法をとることにした。

「突撃にイー、進め！」

偽突撃であった。兵士は喚声だけあげて地面に伏した。無数の手榴弾が飛んできて地響きを立て、硝煙は煙幕のように視界を遮った。

しかし彼らの運命は実は風前のともし火であったのだ。突撃路を入ったほんの五米ばかり先のところにトーチカがあり、その大きな銃眼から敵の重機関銃が日本兵の集団を一払いに薙ぎ倒さんものと、その機会を狙っていたのである。

鷺湖嶺の頂上から砲隊鏡で、戦況を見守っていた歩兵砲中隊の第一小隊長越海慶蔵中尉は、この銃眼の中の敵を見逃さなかった。彼は篠田少尉とは小学校時代ともに机を並べた同級生であった。

距離四百。目標のわずか五米手前に篠田少尉以下数名の日本兵がいるのだ。教範を無視した危険きまわる射撃であったが、越海中尉はやろうと決心した。一分一厘の誤差も許されない。しかし今や一瞬の躊躇もまた許されないのだ。照準はなされた。発射！

突撃路を入った第一小隊の先頭の数人は、目の前で訳の分らない大音響をきいた。そして爆風で紙吹雪のように地面の上にはばまかれた。

二、三度空中転回して漸く元の姿勢に復した中西軍曹は目をあげて見て驚いた。今まで四角だった銃眼が物凄く大きな楕円形に変わっていた。立とうとすると、今度は後ろのネコ陣地から、第二機関銃の重機がその楕円形の下際を撃ってきた。自分の頭上十纏余りのところをヒュンヒュンと弾が通過して、すぐ前のトーチカの中へ吸いこまれていく。中西軍曹はしばし我を忘れてその妙技に見入っていた。

重機の射撃は終わった。小隊長は右手をあげてもう射って、くれるなと後方に合図すると立ち上がった。すぐ横に藤崎一男兵

「突撃にイー、進め！」

准尉は繰り返した。再び無数の手榴弾が目の前に集中してきた。

右第一線、第一小隊の前面にも敵の手榴弾は絶え間なく炸裂していた。小隊長篠田少尉は抜刀すると突撃路の真中に立っていた。

「いいか、突撃するぞ。ついて来いよ」

小隊長は念を押すように一人一人の顔を見ていうと「突撃にイー進め！」号令をかけて柵の中へ飛び込んでいった。第一分隊長中西軍曹、藤崎兵長が続いて飛び込もうとしたが、狭い突撃路一ぱいに手榴弾がドカンドカンと息づくひまもなく閃光をあげた。

小隊長の姿が見えない。突撃路を入っていったきりである。生死が気づかわれた。

「小隊長殿！」

中西軍曹が呼んでみた。

「何だ！早う来んか！」

柵の中から元氣な声が返ってきた。

手榴弾投擲が少し途切れて、顔中煤だらけになった篠田少尉が再び突撃路に姿を現わした。

「今度は号令をかけずに入る。お前たちも喚声をあげずについて来い」

軍刀を振りかぶると無言のまま柵の中へ入って行った。この作戦はうまくいった。一発の手榴弾も飛んで来ない。小隊の先頭の数人が突撃路を通過した。

第五中隊左第一線西川小隊手榴弾敵
右第一線篠田小隊長破壊口より
陣内突入銃眼に肉迫す



後方より連隊砲越海小隊
掩護射撃
頭上スレスレ銃眼命中
第三小隊仲森曹長田中
周一兵長清水上等兵突入
超越攻撃
第五中隊

長が来ていた。二人は並んで、破壊されたトーチカのうしろへ回った。陣地内は森閑として物音一つ聞えてこない。

「敵さん逃げたかな」

「いませんね」

そんな会話をかわした時である。何気なく飛び越えた狭い交通壕の中に、罐詰めの鰯のようにぎっしりと敵兵がひそんでいた。林立する銃剣の切先がススキの葉のように見えた。敵兵は蝗のように壕を飛び出すと白兵戦となった。篠田少尉は軍刀を振りまわしながらその切れ味の悪さに歯ざりしした。

「藤崎兵長、銃剣を貸せ」

戦闘のさなかに藤崎兵長は小隊長の声をきいた。

連隊砲を撃った越海中尉は友軍が空中に舞い上がるのを見てハッとしたり。しかし彼らが再び元気に立ち上がるのを見て胸をなでおろした。彼は第五中隊の兵がどっと敵陣内に突込み、白兵戦のすえ逃げ場を失った敵兵が残る二つのトーチカの中へ入って、銃眼から次々と匍い出して遁走して行くのを見た。さすがに第五中隊の兵士はこれには気がつかなかったようである。

第三分隊長松岡美好軍曹は、トーチカの上上がり敵兵に手榴弾を投げつけていた。ネコの陣地で広口兵長負傷のあと軽機で掩護射撃を続けていた梅田昇兵長は、任務を果たして小隊の突撃に遅れまいと馳せ参じて来た。松岡軍曹はこの梅田兵長を見ると、トーチカの上から手榴弾をくれと叫んだ。手持ちの手榴弾は使いきっていたのである。梅田兵長が手榴弾を渡したとき、トーチカの反対側から敵の軽機関銃手が匍い上がってきた。梅田で、上がり口から銃口を斜め上にして松岡軍曹を狙った。梅田

を越えてきたのだという親密感が湧いていた。勝利を手に入れた運動選手たちのように、誰もがお互いに抱き合いたいような感激を覚えた。広口兵長の負傷だけが気がかりであった。

そのうち敵の迫撃砲弾が陣地に落ちてきた。全員壕の中へ入る。

そして壕の中から第五中隊の兵は、遠くイヌ陣地越しに第三大隊の攻撃を見ることになった。第三大隊の一個中隊が常寧泉城の望楼を攻撃していたのである。それはまるで練兵場の分隊教練のように、遮蔽物のない凹地を各個前進で接敵する悲壮な攻撃であった。龍宮城のような望楼に立て籠った敵は、城壁下に押し寄せてくる日本軍を重機関銃で狙い撃ちしていた。

第二機関銃中隊と連隊砲中隊の越海小隊が第五中隊の陣地にやってきて、第三大隊の攻撃を掩護しはじめた。

第五中隊長松下正克中尉のところへ第三小隊長から一度にわたって連絡があった。松本満上等兵と出合正上等兵が壕の中にいたにもかかわらず、敵迫撃砲の直撃弾を受けて戦死したのであった。松本上等兵の戦死時刻は十一時五十五分、出合上等兵は十四時四十五分であった。

(注) 鷲湖嶺から第五中隊の戦況を見ていた山口大隊長は、松岡美好軍曹の活躍に感激、のちに連隊長から賞詞を授与されることになった。また広口兵長はその後内地送還となり奇跡的に健康を回復した)

第五中隊の攻撃前進中、第二機関銃中隊はネコ陣地からサル陣地に向かって掩護射撃を準備していた。その時、第五中隊が

兵長が「危い」と叫び、松岡軍曹が仰向けに倒れるのと敵軽機が火を吐くのはほとんど同時だった。敵弾を避けるためにわざと倒れた松岡軍曹は、倒れながら発火していた手榴弾を敵の足元に投げつけていた。轟然と爆音が起こり敵兵は軽機関銃を握ったまま戦死した。

サル陣地は大きかった。第二小隊もすでに陣地占領を終っていたが、同じ山の後方にさらにもう一つ陣地が造られていたのである。松下中隊長は、予備隊の第三小隊にその陣地の攻撃を命じた。背中に日の丸をつけた第三小隊長仲森三郎曹長は、これで自分の活躍の場が出来たとばかり元氣一杯、

「おい、手榴弾を投げろ」

と指示しながら走り出した。

第三小隊の先頭にいた田中周一兵長と清水馨上等兵は、トーチカの中に敵が隠れているのを発見して小銃で射撃していた。そのため仲森小隊長との間隔が少し開いていたが、小隊長の声を聞くと二人は大きく手榴弾を投げながら追及した。

「ああうまいこと壕の中へ入ったぞ」

一面を輝やかせて曹長は上機嫌に叫び、三人は小隊の先頭を一面となって敵陣地に突入して行った。突撃大成功。

指揮班の田村博軍曹が、十人ばかり捕虜をずらりと丸太ン棒の柵にくくりつけた。大声で泣き喚いている中国兵がある。

「私は無理矢理に兵隊にさせられて連れて来られたのです。日本軍と戦う気は初めからありませんでした。私を殺さないで下さい」中国語に堪能な田村軍曹の通訳である。

長時間続いた緊張がやっとほぐれ、小隊の中には一緒に死線

接近していくのを阻止するため、サル陣地の前まで出てきて手榴弾を投擲する敵兵が見えた。機関銃の射手が撃とうとすると横山中隊長はにっこりと笑い「機関銃で撃つほどのこともないだろう。俺が小銃で撃つてやろう」といって小銃を構えた。

小銃なら機関銃のように何発も弾薬を消耗しなくても一発ですむ。単独の敵兵に対しては小銃を以てするのが原則にかなっている。中隊長はその原則を守ろうとしたのであろう。しかし敵の監視兵はこれを見ていたらしく却って反対に狙撃され、左頬から後頭部に貫通銃創を負って倒れた。十一時三十分であった。死に顔にはなお微笑がただよっていた。

横山三男中尉は無口だが「自分の恋人は兵隊である」という信条を、最後まで守っていた温情中隊長であった。また正義感が強く一本気で、間違ったことには決して妥協しなかった。陣地の隅に一本の木が生えていた。遺体はその木の下に葬られた。そしてその木の枝に中隊長の乗馬の勒が飾られた。戦場蒼惶の間にあってもお故人の徳を偲ぶ中隊長の哀惜の情の表われであった。幹候五期の出身であった。

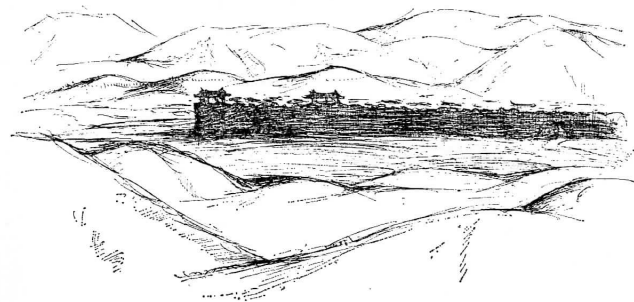
また同じネコ陣地で大隊砲小隊長春原渡中尉は、砲の進入位置を決めるため敵状を偵察していた。十時十分、飛来した敵エコ軽機関銃の一弾は、同中尉の腹部を貫通した。後方の民家に収容し、林軍医がかけつけたが、すでに手の施しようがなく、約二時間後「天皇陛下萬歳」とはつきり二度唱えて帰らぬ人となった。陸士出身、五六期であった。

第五中隊がサル陣地から見えていた望楼攻撃の中隊は第九中隊

であった。

その前日（九月二十九日）午前十一時、中隊全員は指揮小隊の宿舍前に集合した。中隊長矢頭元信中尉は大要次のような訓示をした。

「お前たちの生命は明日いよいよ貰った。わが第九中隊は第三大隊の右翼中隊として常寧城攻略の先陣を承った。中隊長として光栄この上もないと思っている。どうか明日の攻撃にはわが第九中隊の名譽のために勇敢に戦ってくれ。」



第3大隊が攻撃した常寧県城と望楼

大隊長（武智利一大尉）は三百米後方の丘陵に陣をしき、わが中隊の攻撃を見ていられるから勇敢に、そして第九中隊の意気を十分に見せてもらいたいと思う」

午後には分隊長以上が同じ場所に集まり、細部にわたって連絡事項が達せられた。

1、第九中隊は常寧県城正面の望楼

を攻撃占領する。

2、第十一中隊は常寧県城の左角望楼を攻撃占領する（第九中隊と同時刻）。

3、攻撃前進は師団砲兵隊の望楼射撃五発の最終弾と同時に進む。

4、攻撃前進の時期は十三時。

5、第九中隊はその攻撃前進開始の時期までに、敵前五十米の凹地の線まで進出しておく。

6、第十中隊は予備隊となり大隊本部が位置する丘陵の東側で待機する。

そして中隊命令による各隊の攻撃部署は左の通りであった。

一、第一小隊（小隊長宇田准尉）ハAノ傾斜地点マデ進出し第二小隊ノ攻撃ヲ掩護スベシ

一、第二小隊（小隊長仲田曹長）ハ師団砲兵隊ノ砲撃中ニA地点ヨリ凹地へ前進シツツイテ城壁ニトリツキ 望楼ノ左側城壁ヨリ攀登シ突入スベシ

一、指揮小隊ハ第二小隊ト並行シテ前進、望楼ノ右側城壁ヨリ攀登シ突入スベシ

一、第三小隊（小隊長坂本軍曹）ハA地点ヨリ擲弾筒ニヨリ望楼後方ニ対シ掩護射撃ヲスベシ

一、MG小隊（配属ハ小隊長杉本准尉）ハB地点ヨリ城壁ノ銃眼射撃ヲ行フベシ

一、大隊作業隊（隊長西田曹長）及び師団工兵隊一個班（班長塚本伍長）ハ師団砲兵隊ノ砲撃中ニ、望楼ノ城壁ニハシゴヲ立テ、第二小隊及び指揮小隊ノ突入ヲ掩護スベシ

第九中隊は九月三十日、昼食を早めにすませ、全員地下足袋またはハイズをはいた。

第三機関銃中隊の杉本小隊がB地点から掩護射撃をはじめ、中隊はB地点からA地点の傾斜地まで一気に駆け下りた。敵は望楼および城壁にあげられた多数の銃眼から、猛射を浴びせてきた。射撃は正確である。攻撃前進中に藤本太市上等兵が戦死しかにも負傷者が出た。

このようにして第九中隊は予定通りA地点に進出したが、左角望楼を攻撃するはずの第十一中隊がなかなか前進してこない。実は第十一中隊は第九中隊の左側のコブから進出することになっていたのだが、そのコブに到着するまでに中隊長岩下吉次郎少尉が敵迫撃砲弾のために戦死、中村曹長が中隊の指揮を執っていた。そして岩下中隊長に続いて本郷保一上等兵がこれまた迫撃砲弾のために戦死、中隊は敵の猛射をうけて前進不能の状態におちいっていたのである。

第九中隊はそのため正面望楼と左角望楼の二面から射撃されることとなった。その時C地点の大隊本部から、敵火の中を野口明曹長が走ってきた。矢頭中隊長としばらく話をしていたが、傍にいた吉原寛伍長に向かって「本部に行って擲弾筒の榴弾をとって来い」と指示した。矢頭中隊長が攻撃前から擲弾筒榴弾の不足を心配していたのである。吉原伍長は擲弾小隊である第三小隊の森本善作一等兵をつれて出発した。

敵から丸見えの平坦地を横切って、敵に側面を暴露しながら二人は駆けに駆けた。当然敵の銃火は二人に集中してきた。二人の周辺には狂ったように土煙が跳ね上がる。その中をやっ

と大隊本部の高地へたどりつき、その斜面を駆け上がった十数

発の榴弾を受領した。帰途はさらに大変であった。榴弾は重くかつ一発の小銃弾でもそれに当たれば轟然として大爆発を起こすことは必至であった。二人はその任務を全うして無事A地点に戻り、第三小隊長塚本軍曹に榴弾をわたしたのである。

師団砲兵隊の掩護射撃開始の時刻が近づいていた。中隊はその時刻までD地点の凹地に伏せて待機することになった。

しかし凹地に行ってみるとピアノ線が縦横に張りめぐらされ、手榴弾が多数仕掛けてあった。そのため服部敏雄上等兵と金海俊星一等兵がその犠牲となって戦死した。

やがて越中屋正雄中尉が指揮する師団砲兵隊の山砲三門が望楼射撃を開始した。越中屋中隊は漢陽製の鹵獲山砲三門（口径三十七厘五耗、日本製と同じ）を有し、常德作戦にも参加してその真価を知られていた。今度の作戦でも岳麓山の攻撃で大いに活躍している。その二回目の砲撃で正面と左角の望楼の屋根に活躍している。その二回目の砲撃で正面と左角の望楼の屋根が吹っ飛んだ。三回目の砲撃のとき、西田曹長が指揮する作業隊と塚本伍長が指揮する師団工兵一個班が前進をはじめ、数名が城壁の下にとりつきそれぞれ所定の位置にハシゴを立てようとした。敵は手榴弾を投下してこれを阻もうとする。城壁の高さは約十米。勇敢に前進した作業隊の高田始上等兵と山原幸雄一等兵が相ついで戦死した。ともに第十中隊の出身であった。高田上等兵は現役兵、だが入隊前結婚し一女があった。歴代中隊長はこの兵士に気をかけてはいたが、娘の写真を見ることがなく華と散った。

我が砲撃に屈せず、敵は作業隊が立てたハシゴを城壁上から

足で蹴飛ばす。また立てる。再び蹴り倒される。しかし作業隊員は毫も屈せず立派にハシゴを支え続けた。最終弾五発目の砲撃と同時に左のハシゴから第二小隊が、小隊長仲田正曹長を先頭に登りはじめた。第一分隊が井上軍曹を先頭にそれに続く。そして右のハシゴからは中隊長矢頭中尉を先頭に指揮小隊が登ろうとした。矢頭中尉がハシゴに足を掛けた時、敵は三本を束ねた手榴弾をつぎつぎに投下した。中隊長は顔面および右腕に重傷。ハシゴは倒された。



第九中隊の城壁攻撃

C地点の高地からは武智大隊長が激励する大きな声が絶えず聞こえてくる。

左のハシゴからは第二小隊の仲田曹長ほか三、四名が遂に頂上まで登りきった。望楼にとりついた松井某は無念にも敵の銃弾にあたって重傷をうけ後退した。望楼内にはまだ敵がいる様子である。指揮小隊は再びハシゴを立てて城壁

に取りついたが、敵はさらに束ねた手榴弾をつぎつぎと投下、ハシゴが波のように揺れる。第二小隊は遂に予定を変更して第二小隊に続いて登ることになった。しかし望楼の中は友軍の砲撃のために柱が倒れ床が抜けていて、望楼内および城壁の上から頑強に抵抗する敵兵に対して、何人もが当たれるような状態になっていなかったのである。

仲田曹長が遂に望楼内の敵を撃退したらしく日章旗を高々と振った(この日章旗は、後方の各陣地から心配して見守っているすべての日本軍将兵からはっきりと見られ、感激のあまり皆が泣いた)。城壁下の兵が右側のハシゴを取りに行こうとする手榴弾を投げられ、そのたびに負傷者が出る。そのとき望楼の中から仲田曹長が、

「望楼を確保せしも負傷！」

と報告した。その時、曹長は左胸を敵弾に射抜かれていたのである。その直後、大西兵長が望楼の中から、

「仲田曹長戦死！」

と悲痛な報告をした。ときに十五時三十分であった。

望楼内は井上軍曹、三輪兵長、木場兵長、大西兵長で守っていたが、三輪兵長も遂に胸部に重傷を負った(貫通銃創)。地上の兵は気が焦りながらもどうすることも出来ず、城壁上の敵に向かってただ手榴弾を投げつけるより攻撃の方法がない。

そのうち第一小隊、第三小隊のいるA地点に敵の迫撃砲弾が落下しはじめ、第三小隊で浜場明上等兵と榴弾受領の任務を果たして帰ってきた森本善作一等兵が戦死した。また掩護射撃を行っていた第三機関銃中隊のいるB地点にも

迫撃砲弾が落下し、倉畑儀光上等兵が戦死した。

左角望楼からの敵の射撃が激しくなった。これ以上の犠牲を強いることは出来ないかと判断したのであろう、大隊長武智大尉は全員B地点まで後退するように命じた。攻撃前進開始後その時すでに三時間余を経過していた。

しかし中隊は一息入れるひまもなかった。それは次のような大隊命令に接したからである。

一、第九中隊ハ宇田准尉ヲ中隊長代理トシテ明払曉攻撃ヲ再興スベシ

中隊は戦死傷者の収容を行い、第一小隊指揮小隊の一部でA地点を確保した。戦死傷者収容後は、中隊の全兵力でA・B両地点間に陣地を構築し警戒にあたった。

その夜歩兵第二一七連隊の第四中隊と第十二中隊が武智大隊長の指揮下に入ってきた。第四中隊長林正行中尉が武智大尉のところへ申告に行くと、大隊長はその苦勞を謝し攻撃の腹案を示した。それは、本日の突撃と同様まず明日の黎明、大隊は残存全兵力を投入して第一陣の攻撃隊を編成。続いて第二一七連隊の第四中隊、第十二中隊を第二陣として、全滅するともあくまで城壁に突入すべしという悲壮なものであった。

県城の東南望楼を攻撃した第九中隊指揮小隊の分隊長であった吉原寛伍長は、戦死した仲田正曹長を追悼して次のように述べている。「ちょうどわれわれが軍公路で大休止をしていたとき師団輜重隊が通りかかった。同隊の中にいた曹長の満州教導

学校時代の同期生だった人と立ち話したあと、曹長は「おーいお前の隊にチャンチュー(支那酒)あるか? あったら俺の命から一番目に大事なこの本と交換してくれないか」といって背囊より雑誌を取り出し、ついに口説き落として水筒一ぱいに支那酒をつめられた。それから小隊の兵たちの所へ戻ってきて「おい、みんなで飲め」といってふるまわれた。曹長自身はほとんど飲まれなかった。

その当時は一枚の紙、一本の鉛筆でも捨てたいような強行軍の連続だっただけに、自分が苦心して持ってきた貴重な雑誌を惜しげもなく酒ととりかえて、小隊の兵に飲ますということが私たちにはどれほど嬉しかったことか、特に印象深い出来ごとだったのです」

吉原伍長はつづけて語る。

「この戦場で中隊の兵力は三分の一が戦死傷しました。大へん苦しく、地味でもあり、わが第九中隊將兵には決して手柄のある戦闘ではなかったが、非常に勇敢に戦ったことを誇りに思っております」。

午前中に、いち早くウマ陣地を占領した第一中隊は、日暮れまで同陣地にいたのであるが、シカ陣地方面に残敵がいるというのでこれを掃蕩しに出かけた。シカ陣地前方の部落に入り、そのあと永末中隊長指揮の下に、一晚中県城周辺を歩き回った。これは、あるいは県城の敵が脱出してくるのではないかという情況判断から、中隊あげて警戒についていたのであった。夜が明けて中隊は県城の中へ入った。敵は一兵もいなかった。

第四中隊も夜に入って黒木中隊長を中心に城壁付近の偵察をした。これも敵の遁走を予知しての行動であった。事実、第四中隊は常寧川沿いにうごめく敵影を発見、中隊長はこれに射撃命令を与えている。

歩兵第二一七連隊の主力は常寧県城の南側、第二一六連隊のさらに外側に布陣していたが、師団命令により全火炮、全重火器をあげて第二一六連隊の攻撃に協力した。

九月三十日、県城西側高地に陣地を構築していた敵は、第二一六連隊の各中隊によって殲滅されたが、東南望楼上の敵は夜に入ってもなお頑強に抵抗しているため、第二一七連隊の第四中隊と第十二中隊が、第二一六連隊第三大隊長の指揮に入ることとなった。

十月一日午前二時頃、第二一七連隊第三大隊の歩哨が二人の敵兵を捕えてきた。そのあたりに敵兵がうろろしているような状況ではなかったので、よく尋問してみると何と常寧県城内にいるはずの敵第六〇師の軍医少佐と衛生曹長であった。二人の言によると、師長以下全員すでに夜陰に紛れて県城を脱出したが、自分たちは道に迷って日本軍の宿営地に迷いこんでしまったのだという。

各中隊が周辺の部落や川沿いの道を搜索すると、続々と投降兵があらわれ、遂にその収容に手を焼くほどになった。県城の方向でしきりに重機関銃の銃声がかかる。これは遁走する敵の迫撃砲中隊が、同連隊の重機関銃陣地にぶつかり射撃を受けてい

た。そのことはなかったのである。ところが当時、私は消極的な考えから夜陰に城内に突入すれば混乱に陥り、死傷を多くするから城内掃蕩は払暁を待って行えばよいと思ったのである。

時間の記憶はないが夜半第一大隊長谷口成男大尉が飛んできて、

『済まんことをしました。敵は南方に遁走しました』とのことだ。

『しまった』

直ちに城内に突入してみると藻抜けの殻だ。すぐ師団に連絡したがこれも後の祭り、敵は夜陰に乗じてわが警戒網を突破した(実はくぐり抜けて)、まふまふ南方に遁走してしまったのである。その原因は私の処置が消極的であったことが第一、わが連隊を含めて師団の警戒が不十分であったことが第二である。少なくとも二、三千の敵はおったはずなのに惜しいことをした。袋の中から脱出した胸のすくような手際は敵ながら天晴れというほかはない」

前述の林正行中尉の記録から引用する。

「捕えられた敵軍医大尉の話によると、敵第六〇師主脳部の師長、参謀長などは日本軍戦死者の軍服を着用して日本軍に偽装し、暗夜部下を捨て真先に城を脱出したという。師団の調査によると敵捕虜千余名、戦死者無数、重機、チェッコ、迫撃砲など敵師団の装備のほとんどを鹵獲した」

十月一日、第二一六連隊は常寧県城に入城した。敵兵の死体が石畳の道路上にころがっている。道路は狭く家並みは古ぼけて低く何となく陰鬱な町であった。

るのであった。

「敵、常寧を脱出」の報はすでに師団司令部に送られ、第二一七連隊には追撃の命令が出た。同連隊の最南端、黄茅鋪に位置していた第二大隊を前衛に、折から降り出した雨の中を、常寧南方二十五軒の地点(茅田付近)まで急追したが、塔山の山腹を蟻のようになって敵の縦隊が敗走するのを見るのみであった。

常寧県城の敵師長以下の脱出について石川連隊長は、その手記の中で次のように述べている。

「私としては常寧攻撃は連隊独力で十分であるが(事実占領もした)、師団主力が参加する以上、一兵も逃がさず敵を殲滅しなければ意味がないと思ったのである。師団参謀長に常寧攻略は連隊だけで沢山だから、県城南方の敵の退路を塞いでもらいたいと依頼したところ、常寧南方には第二一七連隊の主力を配置するから大丈夫だ、北方に対する遁走に注意してくれといってきたので、

『北方には逃がさぬから南方を頼む』と重ねて依頼した。

連隊が西側高地を占領するとともに敵の大部隊は常寧県城に遁入し、日は完全に暮れおまけに薄曇りの暗夜である。そこで敵の遁走を防ぐため、直ちに常寧城を包囲し、特に右翼におった第一大隊長に常寧南方に対する警戒を厳重にするように指示した。これで常寧県城内にいる敵の師団長以下を、完全に袋の鼠にしたものと思っていたのが間違いのものではなかった。

どうせ城内に遁走した奴である。直ちに突入してしまえば何イ陣地を占領していた第六中隊は北門から入城した。森少尉は敵司令部跡と思われる家屋の中で、敵の戦闘詳報などを多数発見した。敵がいかに狼狽して撤退したかがよくうかがえる。山田良七軍曹は城内の石畳の道を歩きながら中山寺の参道に似ているな、と故郷の風景にふと想いを馳せていた。

第十二中隊長長谷川亘中尉はヤギ陣地攻撃の際、敵手榴弾で右脚に負傷したが、担架に乗って中隊を指揮しながら入城した。中尉は城内の至るところに、直径五十糎余りもある南瓜がごろごろしていたのを見ていたという。なお同中尉は傷が化膿して腫れ上がり、遂に十月十七日漢口に後送されて入院した。

民家からは日本軍の装備が多数発見され、また第三師団(幸部隊)の野戦郵便局通帳、岐阜県発信の書簡などが発見された。明らかに岐阜第六八連隊の戦死者のものである。第三四師団が常寧を攻撃する前に第三師団、特に岐阜第六八連隊がいかに悪戦苦闘したかがいまさらのように思い知らされた。

玉川大佐は常寧の攻撃終了後、衡陽近くで補充を受け、第二大隊(大隊長荻原彦次郎少佐)を第三四師団に残して前進、桂林の戦闘に参加、その後柳州まで進出、さらに遷江、南寧地区の守備に任じた。

師団に残された右記の荻原大隊(独立山砲第五連隊第二大隊)は、その後第二一七連隊に配属されて芷江作戦に参加。荻原大隊長は作戦中に負傷して入院、終戦後内地に帰還している。